



始



蟻通

梗概 紀貫之玉津島の明神に参らんとて和泉の國に到りけるに、俄に一天かき曇りて大雨降り、其上乗り居たる駒さへ卧して前後を辨へすなりぬ。かこる所へ一人の宮人傘をさして松明をともし出で來り一に言葉を掛け尋たれバ、下馬して通りたるかと答ふ、貫之ここハ馬上のかなはぬ所なるかと重ねて尋ぬれば、蟻通の明神とて物咎めし給ふ神の以ます所なりと語り、御身は誰なるかと言へるに、紀貫之なる由を答ふ。さらば和歌をよみて神慮を慰めよど言はれ取敢へず「雨雲の立ち重なれる夜はなればありとほーとも思ふべきかは」と讀みて奉りに宮人は感泣して神も納受し給ふらんと言ひ、それより和歌の徳を稱へ祝詞を奏し、眞は我は明神なるが、貫之が言の葉の妙なる心を感じずる故に、假に姿を現せるなりとて立ち隠れ給ひけり



シテ 宮人
ワキ 紀貫之
ワキツレ 従者二人
所 和泉國蟻通明神
季 春

蟻通

わき上アカヒメ
弓歌の私、戎道アマミノミコトとして
ゑんアヘンは紀、費ヒヨウえよてひ、あああ
北ヒタチよ、まよとくす、未住者ミズシヤクよ
第ヒヂにはゆ程ヒヨウよ、只今、紀の路ヒロ乃、猿モノよ、卦ハナい
わき上アカヒメ
古アヤ、爰アヘンよ、御モニく現アマニみ出スルる候モリ、
よる北

閑戸比的多るに都のすゑ月夜あはれも
持と思ひ居る方を云ふ井へゆる庵ど
たまくれわる室ふゆゆるハ里ちうけ
ゆる達也あう カキノ
に日くまゐりあきらかなる弱き
子て前後をゑまゆいふ灯暗や 中吟

て六散行虜民ルのぬれあーをもひ
よき難也ハシマサニ、虜烹いかまべき便も
あーあゝ禁止ハシマサニ サレ上、
又頻ハシマサニ、遠寺ハシマサニの煙ハシマサニ、
へど何となく宮ハシマサニも源郷ハシマサニの船ハシマサニ也
浦ハシマサニの光なんどふす持ハシマサニ神さびんハシマサニも

沈するか松陰をさすまゝ灯もなくましま
めのあうもゆへと神もさすねりあはげと
了承すよ官も独立りも目へ奴車ふと
内灯はくとも和光の氣はよ
も墨らじあくまほ活乃まちせむ

わき
なづくあのや乃、まよ津かて、やく届き

事のいばありよ、お宿もなーと
さとくお通すあき わき
けきもんへも、続もあはる駒まへふと
前後をとどくゆ也 一と下馬を渡り
も、がくをもあう 望上一と下馬とふん
得ぬ寛ハ馬上のあまかりーとあく勿旅

あの西車や蟻通比の神とて、物とづめ
物ふ清神乃かくそとあつて馬上阿木
よも西令下ハシベキ 瓦上 艺も媚 モ の店事
がね清社ハ利は森れ肉 瓦上 寂も森ハ文
人の焼乃専の射よりアレハ 瓦上 寂も官
居も 同上 故通比 同上 神の鳥居乃ニ柱立

雲もきよ須ノキバニ元ニヤ、ニ
ニセマウルヤニニニニニニニニニニ
けるニ駕トヨオニニニニニニニニニニ
ニ元ニヤニニニニニニニニニニニニニ
系もくつあぐ駒ノクニニニニニニニ
忍ききアテナシシナシシナシシナシ
ナシシナシシナシシナシシナシシナシ

西車ハいつも人モテ渡りひそ 瓦上 艺ハ紀
東之エムシウグハ住吉玉津勝也よりい

一
費ひにくゆ
キモトバアトヒニシテ
神をもとしめ
おゆ向き
もきよ修みて
シヘチキムハシムルノトモアキ
我ホガ
今此詞のせいぞ
神高ツモ叶
あべキト思
ひなぐも言のなれ
ホシシムホシ
中止
あぬ事ハシタナキ
ホシシムホシ
あぬ事ハシタナキ
ホシシムホシ

一
ありと石ーと
もとあじきり
あ霞雲の
立かさなき
あぬ事ハシタナ
ケル
思へたりハ
面白レ
我ホ叶ハぬ耳
ふごに面白レ
とあふは
あホア
どウ納更
ナリ
あべき
わき
禾ム
よあ
ぬ科
なれ
なじう
納更
あう
べき
と
万乃詞
天雲の

わき立かさぬりそく晴ましあれば、してのやまや
不トとも思ふべからずもあく画白比段
すや日^ト凡^トあるは六義あり是六道志^ヤ
ちまことに定むひと六代あわさまするあり
上^ト清まハおう乃^トとよざハ神代よりも幼^ヤ
里^ト今人備^トあま称^ト誰^ト是^トを布^ト色^ト

さうん^ト神^トみを^ト夢^トえハ^ト滞^ト書^ト所^トを承^トりて^ヤ
古^ト今^トの^トお^ト此^トを^ト攬^トひそ^ト、^ト收^トびを^トの
ヘ^ト君^ト代^ト乃^ト走^ト成^ト乃^トを^ト駆^ト曲^ト元^トお^トり
く^トえ^トれ^トば^ト奇^トせん^トも^ト不^トなるも^ト是^トもつ^ト
私^ト人^ト代^トよ^トよん^トて^ト甚^トれ^トる風^ト俗^ト、^ト
長^ト壽^ト福^ト、^ト旋^ト混^ト本^トの^トまく^トひ^トを^トあ^トリ^ヤ

雜物ひと角はあくざれが源流をうやく
茂るホヒ花の中乃當。又秋ホ蝶の咲
あづきり和ホ比種なぬ。あきを今
のあわう邪をなす。まきはむどうも神を
納更の心をうく。え人ハ^上わき、ウ
毛毛乃。闇の清水より射る月毛乃

ば駒を引立こればあくさももと比類不
先焉く。越鳥南枝よ巣をう毛胡馬
小風よひをへよう。哥よ和ぐ神高誰
う神高乃。誂をあふぎあるべき。あき
よそま一宿半脱羽をあくせきゆへ
一て來りひ。引上りてく。脱羽をやさんと神の

白木錦掛まくも 園ドキ向とタモれ
一 やもを教ら一て 真拜も 謹上真拜
敬白神司ハ人の八じ女、も人の神樂をのこ
雪比神を起一あゆかもを掛け浦
神高をまく一めまる正神院は但そ狀も
神患を波まん有能や 拝神高をまく

ある事、和およりよう一きふ歌一す
中少も神樂を奏一し女乃袖毛もぐ毛
おもて白也、神の若戸比古乃袖毛ひ出
まく、^上和光同草も絆縁の始め、^下ハ相
成道利拘のゆり、神の代七代、^上ま
るより厚すて、^下情歌もう事あり

塔

天地ひけめりてよま舞おはるアモモキ
アモレタモ今モ之ノ御のまはノハ成ルを
感するがモハシタ婆モ有るそドテ鳥居の
笠木に立隱れアモハマリトヨムトモモ
ウタタナシ揚ガ失モタリモ之モ見を怪びの
タヌの神樂歌ハめて放ち立モヨ立高ニ

昭和十四年五月廿五日印刷
昭和十四年五月三十日發行

定價金五拾錢

著作者 寶生新

東京市下谷區上野櫻木町四十八番地
發行兼印刷者 江島伊兵衛

發行所 下掛寶生流譜本刊行會

納本省

有所權能著

392
3
470

終

